

ミカンコナカイガラムシのイチゴでの発生について

1 害虫名：ミカンコナカイガラムシ *Planococcus citri* (Risso)

2 発生作物名：イチゴ（品種：とちおとめ）

3 発生経過

平成27年3月に真岡市の促成栽培イチゴにおいて、コナカイガラムシ類の寄生と被害発生が認められた。横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、ミカンコナカイガラムシと同定された。本種のイチゴへの寄生事例は、国内では報告されていない。



図1 ミカンコナカイガラムシ



図2 イチゴ葉に寄生するミカンコナカイガラムシ



図3 ミカンコナカイガラムシ老熟成虫と卵のう



図4 イチゴの株元に産み付けられた卵のう

4 被害の特徴

成幼虫は株全体に寄生するが、特に、葉脈の窪みや、葉柄の付け根の隙間に集中する。寄生部位には、白いロウ物質で覆われた卵のうが付着する。寄生された株では、成幼虫の吸汁により生育が阻害され、また、排泄物（甘露）にすす状のかび発生し、葉や果実を汚損する。

5 形態及び生態

雌成虫は体長 3.5mm 内外、体表を覆う白色粉状のロウ質物は背中線の部分で薄く、橙黄色～暗褐色の地肌が露出して、橙黄色の縦線が現れる。体周縁部のロウ質分泌物の突起は短く 18 対である。25℃では約 44 日で 1 世代を経過する（新井, 1996）。本土では露地越冬しないとされるが、休眠性を持たず、温室害虫として国内で広く周年発生する。食性は広範囲に及び、果樹類、野菜類、花き類など多くの植物に寄生し加害する。

6 防除対策

(1) イチゴにおいて本種に適用のある農薬はない。

(2) 本種は寄主範囲が広いので、栽培施設内に不要な植物の持ち込みを控え、施設内外の雑草を適切に管理する。

(3) ほ場内をよく観察し、早期発見に努める。発生を認めたら、寄生葉を除去し、土中に埋設するなど適切に処分する。

7 引用文献

新井 朋徳 (1996) 応動昆. 40: 25-34.

詳細は、農業環境指導センター (Tel. 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。